

学 界 報 告

〔学会名〕

Social Media & Society 2017

〔参加セッション名〕

Poster Reception

〔発表題目〕

日本の選挙制度の違いによる選挙期間中の候補者の Twitter 投稿傾向の違い

〔大会期間〕

平成29年7月28日(金)～平成29年7月30日(日)

〔場 所〕

カナダ・トロント (Ryerson University)

※記事

Social Media & Society 2017 はその名の通りソーシャルメディアと社会の関係を研究対象とした国際学会であり、今年で8回目を数える。著者は2014年から4年連続の参加となったが、例年通り国内からの参加者は少なく、著者らを除けば新潟大学のグループのみであった。全体では27の国と地域から200名以上の研究者が参加し、アジアからの参加者も目立っていた。会場では日本に留学経験のあるトロント大学のグループなど日本に縁のある研究者も見られたため、日本人研究者の少なさは寂しいものであった。

研究発表については、学際的な分野ならではの特徴としてテーマが多岐に亘っていた。本年度のセッションは「Influencers」, 「Theories & Methods」, 「Politics」, 「Sharing Culture」, 「Health & Well-Being」, 「Language, Music & Culture」, 「Young People & Social

Media Data」, 「Opinion Mining」, 「Rumors & (In)Civility」, 「Business: Opportunities & Practices」, 「Public Sector」, 「Self Brand」, 「Bots」, 「Social Media Use & Users」といった構成となっており、分析手法に関するテーマが減っている一方で、年々テーマが細分化している印象を受けている。また、政治や文化に関する研究発表では、国ごとの前提条件の差異の大きさがところどころに見られた。そのため、活発にディスカッションするというよりは、情報交換のようなやり取りが多くなっていた。興味深かったのは、Keynoteの様子をグラフィックレコーディングで表現し、サイトで公開 (<http://socialmediaandsociety.org/keynotes/>) していたことである。当該の画像はソーシャルメディア上でもすぐに流通しており、ソーシャルメディアを研究対象とする学会ならではの運営上の工夫となっていた。

著者自体の発表は2015年に行った衆議院総選挙期間中の候補者の Twitter 投稿を対象とした研究を2016年の参議院通常選挙に拡張し、両選挙期間中の候補者の Twitter 投稿傾向の違いを比較したものである。2016年の米国大統領選挙に関する研究発表がいくつか見られたこともあり、選挙とソーシャルメディアという研究テーマへの関心は高いようであった。ただし、研究の結論が「あまりソーシャルメディアが活用されていない」というものであったため、「ソーシャルメディアの可能性」というニーズには応えられていないようであった。どのようなストーリーで研究成果を示すかについて国際学会ならではの観点を欠いていたことは反省点であった。

最後に、今回は1泊4日（うち機中2泊）
というかなりの強行日程での参加となり、授
業期間に国際学会に参加することの難しさを
実感した。それでも、最新の研究動向に触れ、
国外の研究者とも交流することができたのは
貴重な機会となった。この経験を今後の研究
に活かしていきたい。

（吉見 憲二）